

2025年9月

課題本 『モモ』 ミヒャエル・エンデ/作 大島かおり/訳

岩波書店 1976年

『「モモ」を読むシュタイナーの世界観を地下水として』

子安美知子/著 学陽書房 1987年

◆◆◆9月の読書会から

今月は課題本が2冊ありました。エンデの名作『モモ』と『「モモ」を読む』、シュタイナーの影響を受けたエンデが『モモ』の中にあるシュタイナーの世界について子安さんが解説した本です。

『モモ』を久しぶりに読んだ人もいて、大人になって読んだモモはどういう風に感じられたでしょうか。

(文責:森下)

2025 年9月竹原読書会『モモ』

(ミヒャエル・エンデ/作 大島かおり/訳 岩波書店 1976)

吉川五百枝

「こんな分けのわからん子どもの話を読むんですか」という類いの意見を聞きながら竹原読書会を始めたのは、1999 年の初夏のことです。それまで長く続いてきた社会学系の学習会を閉じて、新しく読書会を始めたいと言われた集まりでした。社会の謂れなき差別や矛盾した制度などをしっかり学習されている会員の皆さんと、私は「文学」のジャンルを通してものを考える方途を一緒に体験したいと思っていたのです。この会の前身で読まれた本の題名からすれば、どんな本を先ず紹介しようかと随分考えました。そして、『モモ』を選びました。『モモ』は、高学年の子どもでも読めるし、これまでとは全く違う肌さわりのファンタジーです。

これが 25 年前の思い出です。

前の学習会から続いて参加しておられた方々は、殆ど亡くなられました。今回の課題本『モモ』は、初めて取り上げるようなものです。

『モモ』は、1973 年〔邦訳 1976 年〕出版されました。1929 年ドイツ生まれのミヒャエル・エンデの作品は、日本でもたくさんの出版がなされています。それに、文学作品だけではなく、「シュタイナー教育」とか「オイリュトミー」とか、「アントロポゾフィー(人智学)」など別の展開でもエンデがよく引き合いに出されていました。

今回、当番さんが、作品を深く掘り下げるために多くの資料を作ってくくださったように、研究論説がたくさんあります。年度当初の選定時に挙げられた希望は『モモ』だったのですが、県立図書館のセットの中に、『「モモ」を読む シュタイナーの世界観を地下水として』(子安美知子著 学陽書房 1987 年)がありましたので、同時に貸し出しを受けました。課題本として

ではなく、ついでに読まれる本の紹介です。著者の子安美知子さんは、シュタイナー思想を周りに広めたドイツ文学者です。

ファンタジー作品は、現実の自分が居るのとは別のところ(世界)を想定しますが、視点を変えることによって現実世界に別の色を帯びさせます。しかも、『モモ』は、「モモ」という“女の子とはこういうもの”という規準では計れない子どもとして描いてあるので、思い込みで読み始めると戸惑ってしまいます。

自分が知っていることだけで世界は成り立っている訳ではないし、子どもが常に教えなければならない存在というわけでもない。そんな自分のスタートラインをちょっと後方に引き直したくなる出発です。

邦訳後、何十年も経つので、さまざまな批評が出回りましたが、メッセージ性が突出していて腰が引けるという意見もあります。文学は、正解がないというのが持ち味だと思っていますから、描かれる人達の底知れぬ混迷や、まだ見ぬ先の世界の多様さなどは、正解の証拠となるものではありません。どの部分が心に残るかは、その人の持ち分だなと思います。

『モモ』を読むとき、今回の紹介本『モモを読む』に重ねると、合理的な説明が出来て実に読みやすい。場面々々で、エンデの記述がシュタイナーの世界観のどういう所に依拠しているかを丁寧に示してあるからです。ただ、原本はドイツ語です。邦訳では、ドイツ語での表現の正確さが解りません。「シュタイナーの世界の三重性」など、日本語では「身体・魂・精神」と訳されていても、通常の日本語では「魂」と「精神」の区別がつきにくい。つまり、「人智学」と言われるものの理解が、ドイツ語を知らない者には、簡単に了解したと言えないという事が起きるのです。「シュタイナーの世界」の説明用語も、「転生」「修行」「内的秘教」「因果応報」など、日本語としても多義で難儀な言葉なのです。

しかし、「人智学」としては解りにくくても、「文学」は具体です。「モモ」が生身として具体的に書き込まれているから、子安氏の〈高次な精神性〉も想像できるのです。「モモ」は、〈相手の話を聞くことが出来る〉と書かれています。その何頁にも書かれる会話から、日本語で言うなら「聞く」ではなく「聴く」に近いらしい、自分の立場を空っぽにして相手のいうことを時間をかけて聴いている、それらの聴き方の描写から「モモ」が示す「高次の精神」の相貌に近づける気がします。『『モモ』を読む』では〈新しい聴覚が魂に生じる〉とシュタイナーの言葉で解説されていました。普段の日常生活での自分の「聞く・聴く」が、鏡に映される自分の姿として見えてくるのです。「文学」にできることの一つ、自己内部の外在化です。

小説は、「見えないものを見る化する」という特技があります。ファンタジーはその技を駆使します。〈見えない時間〉を、マイスター・ホラなる超越存在、カメのカシオペア、いのちの花、何でも見えるメガネ、灰色の葉巻、など、普通に想像出来る見える形で文字にします。(見える化)は、通常の秩序や思い込みの内外の枠を壊してその変容を姿形を持って語れます。床屋のフージー氏が、「生きていてなんになった？」と自分にいうのも、「ちゃんとした暮らし」と考えていることを顕在化させて初めて気がつく。それが「モモ」のもたらした世界だと思うのです。エンデは、〈人間の知的理解、合理的解釈、啓蒙的意図を避けようとしている〉と言うのだから、「人智学」ではなく、具象を追求して『モモ』という「文学」を創作しているのです。

『モモ』を読んで多くの人が共鳴し合うのは、「時間どろぼう」という「灰色の男達」の存在が、

自分の生活の中でリアルに感じられる部分です。〈自分の過去からの総和〉を振り返れば「時間どろぼう」の存在を認めざるを得ません。『モモ』でも、人々の時間の節約が、それぞれの不安や争いの原因になっています。

エンデが依って立つシュタイナーの教育観では、知識の羅列ではなく、「体験」が重要視されている事が見えます。「時間どろぼう」が放たれ、消費主義の影響を与えられる現実生活に、針や数字のない〈星の時間〉に気づく重要さが示唆されます。テクノロジーの集積地とも言えるシリコンバレーの街中に「シュタイナー学校」があり、テクノロジー研究の猛者達が、我が子を通わせています。かれらは、針も数字も書かれていない「星の時間」の時計が読めることを重視しているのでしょうか。「シュタイナー教育」も本来は、「人とはどういうものか、どう生きるか」という問いから出発していて、その探求途上にあるに違いありません。エンデも、生き方に「コスパ・タイパ」を当てはめないように「文学」は存在する、と賛成してくれると思っています。

『モモ』 『「モモ」を読む』を読んで

◆ 【 JM 】

今月は『モモ』と『「モモ」を読む』の 2 冊である。私が読書会に入って初めてのケースである。

文学作品は自由に読みたい。内容を逸脱する読みはよくないが、内容に沿っていればどう読もうが読み手の自由であると思う。初めて作品に触れる時、先入観無しに読みたいと考え、読む前に作者や作品について調べるのは避けている。

まず『モモ』から読む。おもしろい。楽しい。モモは聞き上手である。「聞く」ことは難しい。私事になるが、以前母と喋っているのを側で聞いていた夫に「2 人とも自分の言いたいことだけ喋っていて、会話していない」と言われたことがある。驚いた。私は母と会話していると思っていた。おそらく母もそうだろう。しかし冷静に聞いている者にはそうは聞こえなかったようだ。

それ以来、誰かと話している時密かに「会話しているか？」と自らに問いかけるようになった。「あ～、お互いに言いたいことだけ言っているなあ」と感じる事が度々ある。聞くことは難しい。

モモは黙って聞く。相手に話したいだけ話をさせる。相手は話すことによって自分の考えを整理し、解決策を見いだしていく。これは簡単なようで難しい。こんなふうに相手の話に傾聴できるようになりたい。皆がこうであれば争い事はぐっと減るに違いない。そういえば『少年と犬』の犬の名前は「多聞」だったよなと、見当違いなことを思い出す。しかし、この名前に込めた作者の思いはあるはずだ。

そんなモモだから時間どろぼうの存在に気づくことができたのだろう。時間どろぼうとの闘いはスリリングで、マイスター・ホラに出会うまでの道のりは複雑だけれど、示唆に富んでいる。自分だけの時間の花の場面は美しい。現代社会を風刺している…のだろうだけれど、純粋に物語を楽しむのもいいと思う。

この作品は 1973 年に発表されているが、1986 年に映画化されている。CG がない時代にどのように表現しているのか気になって探した。YouTube で英語版を見つけ、視聴した。冒

頭のシーンにはエンデ自身が列車の乗客として登場、なんと向かいの客はマイスター・ホラを演じた役者さんだ。エンデはなかなかのハンサムさんで、ヒッチコックよりうんと役者っぽい。期待していた時間の花のシーンは、CG がないと仕方ないよねという出来だったが、なんとか映像化しようという気持ちは伝わってきた。

小説の映像化を嫌う方々もおられるが、私は「どのように表現しているのだろう」という興味の方が大きく、よく見る。「あ〜っ！」と憤懣やるかたなきことも多いが、「なるほど〜」と感嘆することもある。キャスティング1つとっても「ナイス！」と思うこともあれば「なんで？」と思うこともある。小説と映画、ドラマは別物であり、脚本家や監督の表現である。私の脳内は自由であるが、映像化となると予算や時間の制限があり難しいと思う。

続いて読んだ『「モモ」を読む』は「シュタイナーの世界観を地下水として」という副題の通り、シュタイナー教育と『モモ』を絡めて書かれている。しかし、あたかもエンデがシュタイナー教育普及のために『モモ』を書いたように読んでしまうのは危険であると思った。この本の中にも「エンデはじつは説明ということをひどくきらっています。できることならば自分の作品にいつさいのコメントをつけたくない」(P.138)「自由に読む余地を残しておきましょう」(P.166)「芸術は理解するものではない」(P.182〜3)と書かれている。作者が「作品は自由に読んでほしい」「作品に説明などしてほしくない」と言い、この本の筆者自身がそれを受け止めているにも関わらず、なぜここまでシュタイナー教育と結びつけて語っておられるのか理解できない。しかし、1つの読み方として許容することにしよう。こういう読みもあるのだと学習した。

◆【 T 】

床屋のフージーさんと灰色の紳士の会話で色々考えさせられた。

フージーさんが、〈俺の人生はこうして過ぎていくのか。はさみと、おしゃべりと、せっけんの泡の人生だ。いったい生きていてなんになった？〉というように気分が落ち込んだとき、灰色の紳士がやってきて時間の無駄遣いをなくしたら人生が変わると言った。灰色の紳士がいう無駄遣いとは、お客とのおしゃべり、お母さんの世話、ペットの世話、歌や本や友達付き合い…しかし、これらはけっして無駄な時間ではなく、むしろ人生の核となる部分ではないだろうか。

無駄を省いて効率よく働くことも、集中して働くことも大切なことだと思うが、あくせく働くことだけが人生の目的ではなく、仕事を楽しむことや自分の喜びに時間を割くことも大切なことだ。

灰色の男たちは、現代社会ではコンピュータとかスマホとかテクノロジー等のことだろうか？それらの導入で仕事は時間短縮し効率的に働くことが出来るようになった。しかし便利になった反面、新たな仕事が増えたようにも思える。またスマホにかかる時間は膨大だ。ニュースを検索したりゲームをしたりすると、1時間2時間はあっという間に過ぎていく。

私たちは、コンピュータやスマホ・様々なテクノロジーの恩恵を受け豊かで快適な生活を享受しているが、この文明の利器により獲得した時間・節約した時間をどのように使うかが問われているのではないだろうか。時間を惜しんでせわしく動き回ったり心身の健康を損なう

まで働いたりするのではなく、時には立ち止まり自分や回りを見回すゆとりを持つことが大事である。

『モモを読む』の中に、〈私の内に、小さい小さいモモでいい、いつしか住みはじめている、と気づくようにしてみませんか。人間はだれもが一つの小宇宙、それぞれにいつかモモが住みついているはずです。〉とある。忙しい毎日ではあるが、時には立ち止まり振り返り自分を見つめることで自分の中に住んでいるモモを見つけることができるだろう。自分の中のモモと対話しながら自分の生き方を省みることが大切だと思う。

◆【 KH 】

メモ書き「モモ」を読む 子安美知子 を読んで

●〈いちどもない路〉とは時間的な否定。足を踏み入れた途端、まるで激しい潮流に逆らって進むか、吹いているとは感じられないのに強く押し返す風にたちむかっているかのような感じ。後ろ向きに歩く。

●〈どこにもない家〉は、空間的な否定。

生きながらにして、ある境界を超え、そこから再び帰ってきそうな可能性

そこは 死の国→精神世界の国・生命がみなもとの国でもある。

●死の中に、いのちの胚芽がある、という永遠のいとなみの意味における、死の国だという。

●人間は、身体と魂と精神の三重性からつくられており、私たちはこの3つの世界の住人である。

●いわゆる“死”は、自我が精神世界へ帰ることで、実際にはそちらでの生が始まる。

一般常識として持っている時間、空間の“否定”と考えれば良いのか〜なんとまあ難しいこと〜(ため息)

私は、この論考を読み進めながら、シュタイナーの研究者はこんな風に『モモ』を読むのかと驚嘆したのだけれど、ふと気づくと引きずられるどころか、アップアップと溺れそうになりながら読書会当日を迎えていた。45年前に『モモ』を読んだ時には、モモが灰色の男たちから時間を取り戻す最終章をワクワクドキドキしながら読み終えた記憶がある。シュタイナーの体論、魂論までは、まだふむふむと理解できても、死の国から精神世界の国へとなったところで???とにかく最後まで読みきったものの完全に消化不良。だから、担当のお二人が、この本の要約版を作ってきてくださったことに、本当に感謝した。四苦八苦していた私の1週間をお見通しかのように手渡された冊子。この要約を参考にして、感想文がかけるかも。ところがである、読書会の諸先輩方は、ことも無げに、セットになっている課題本だからと言って、全て読まなくてもいいし、「モモ」を味わう、物語として読むのにシュタイナー学はいらないよと断言される方も。カッコイイなあ…。

とにかく課題になっているものは最後まで目を通さなきゃ、少しでも中身を理解しなきゃと、あたふたしてしまって、肝心なことを忘れていた。本題は『モモ』である。というわけで、シュタイナーは、読書会当日に無事返却して、安心して「モモ」の再読に取り掛かった。

冒頭から、なんと味わい深いことか。(引用)～ただの芝居に過ぎない、舞台上の人生の方が、自分たちの日常の生活よりも真実にちかいのではないかと思えてくるのです。古い円形劇場に集まってくるみんなは、このもう一つの現実には耳をかたむけることをこよなく愛していました。大きな石のすり鉢の中に座って、世界のあらゆるものの声に耳を傾けるモモは、まるで星の世界の声を聞こうとしている大きな耳たぶの底にいます。～

ここは、のちに時間の花を見に行くシーンへと見事につながる伏線。

次に、道路掃除夫 ベッポ。(引用)～彼のことを頭が少しおかしいんじゃないかと考えている人がおおぜいいる。彼はなにかきかれてもニコニコと笑うばかりで返事をしないから。～

質問をじっくり考え、どう答えるべきか、時間をかけて考える。それも、少なくとも二時間、時にはまる 1 日考えてから。(引用)～世の中の不幸というのはすべてみんながやたらうそをつくことから生まれている。それもついたらうそばかりではない。せっかちすぎたり、正しくものを見極めずにうっかり口にしたる嘘のせい。とっても長い道路を受け持つことがあるんだ。おっそろしく長くて、これじゃとてもやりきれない。こう思ってしまう。そこでせかせか動き出す。どんどんスピードを上げてゆく。時々目を上げてみるんだが、いつ見てものこりの道路はちっとも減っていない。だからもっとすごい勢いで働きまくる。心配でたまらないんだ。そしてしまいには息がきれて働けなくなってしまふ。

「こういうやり方はいかんのだと。」のちにベッポは、いかんと否定した、こんな働き方をやむを得ず選んでするようになってしまふ。大切な、唯一大切なモモを救うために。

(引用) 一度に、どうろぜんぶのことを考えてはいかん、わかるかな？ つぎの一步のことだけ、つぎのひと呼吸のことだけ、つぎのひとはきのことだけを考えるんだ。いつもただ次のことだけをな。また一休みして、考え込み、それから「すると楽しくなってくる」これが大事なことなんだな、たのしければ、仕事がうまくはかどる。こういう風にやらにやあダメなんだ。ひょっと気が付いたときには、一步一步進んできた道路がぜんぶ終わつとる。どうしてやり遂げたかは自分でもわからん。これが大事なんだ。

ベッポは自分の仕事について語っているのだけれど、これは人生全般に通じる、ひとの在り方そのものを語っていると思う。解決の困難な問題に直面したとき、先のことなど全く見通せないのに、やたらと焦って自身の能力も考えずにきりきり舞い。挙句に疲れ果ててしまふか、進む方向が見えなくなって、一步も歩けなくなってしまふ。私のことじゃないか。

本家本元 作品に登場する「さかさま小路」では、カシオペアが、ウシロムキニススメとモモに助言をくれる。過去へと遡ることであって、時間的な否定ではない。「どこにもない家」マイスター・ゼクンドウス・ミヌティウス・ホラ のすまいであり、空間の否定ではない。そこは三人兄弟(過去、現在、未来)が住んでいる家であり、ホラは時間を司るひと(というか仙人だなあ)。

人間がじぶんの時間をどうするかは、自分自身で決めなくてはならないとホラはいう。

モモは宇宙に響く音、数えきれないほどの種類の音を、円形劇場で聞いていた。それは音楽のようでいて全くべつのもの、かつて星空の下で静けさにじっと耳を傾けていたとき、はるか彼方から密やかに聞こえてきた音楽。大きな大きな耳たぶのそこにいるように表現されたあの、音楽。

ところが、ホラの元で聞いたのは、ひとつひとつの音がだんだんとはっきりすみわたった音楽。

それは、自分だけの時間が奏でる音楽だったから。

(引用)モモは、ふとこんな気がしました。この鳴りひびく光こそが、どれとして同じものない、あの類なく美しい花の一つ一つをくらい水底から呼び出して形を与えているのではないのでしょうか。

時間の花は、鳴りひびく“光”が呼び出して形を与えたもの。なんと美しく幻想的な世界感だろう。

ホラは、「どの人間にも、それぞれに、今お前が言ってきたような場所がある。お前の見たり聞いたりしてきたものはね、モモ、あれはぜんぶの人間の時間じゃないんだよ。お前だけの分の時間なのだと。」と語っている。この宇宙感、圧巻である。ここにきて、シュタイナーは宇宙の彼方へと飛び去った。45年ぶりに再読した「モモ」の読後感は、高木のぶこさんの『天の穴』から見上げた夜空、そして『光抱く友よ』涼子が松尾に感じた光へと繋がって…。私は今しばらく、大きな耳たぶの底に佇んでいたい気分である。自分だけの時間が奏でる音楽は、耳をすませて、カシオペイアを眺めていたら聴こえてくるだろうか。

◆ 【 望月悦子 】

この物語「モモ」の中心テーマは「時間の大切さ」で「時間は貯めるものではなく、今この瞬間を大切に生きることが重要だ」と教えてくれます。具体的なストーリーは、ファンタジー要素を交えながら構成されています。

今回の例会では、「モモ」「シュタイナー教育」「モモを読む:子安美和子著」の3点から読み解いていきましたが、一冊の本を読む時、読んだ時期によって思いや考えが異なることがあることをいつも痛感します。今回は、私が「モモ」を読んだ時期に考えたことを私なりにまとめてみたいと思いました。

エンデは、児童文学である「モモ」のテーマを分かりやすく、想像力をかきたてながら子どもたちも理解しやすいように展開させています。私が読んだ児童期には、オバケクラゲと闘い、台風の目に突入などハラハラドキドキしながら大冒険に圧巻されたものです。一方「時間泥棒」「時間貯蓄銀行」「時間貯蓄家」何これと思いながら素通りした部分もあったように思います。ワクワクドキドキしたのは、カシオペイアの亀の甲羅の文字に導かれて行動できる場面、「さかさま小路」「どこにもない家」「時間の花」等々の展開。最後葉巻を取られて灰色の男たちは消えてしまった。やれやれ良かった。しんどかった。でも面白かったで、終わりその後すっかり忘れていました。

今回老齢期に読んでみると、読書会のメンバーの発言の力を絡ませることができ、児童期に素通りしていたエンデの意図が明確に読み取れたように思います。

何よりエンデの生きてきた時代背景により生まれた作品であり、世界の人たちに警告として書かざるを得なかった意図が良く理解できました。1929年に生まれたエンデは、10代の時第2次世界大戦(1939～1945年)で、ドイツが行ったナチスの忌まわしい全体主義を体験しています。30代では、ベルリンの崩壊(1961年)で社会主義・資本主義の価値観の逆転を体験、40代では、高度経済成長時代(1960～1973年)敗戦の復興から急激な工業化・都市化

により公害が社会問題・環境破壊・灰色の光化学スモッグの時代に突入している時期です。敗戦国日本は朝鮮戦争・ベトナム戦争による軍需産業によって 1955 年～1973 年高度成長期に突入しています。どちらも共通していることは、敗戦の貧しさから物質の豊かさを追い求め、豊かになることが最高に良いことのように働いた。まさに灰色の男たちが誘導して登場人物が変容したように、日本国民も変容した。その後のバブル期にはバブルに踊らされ、時間泥棒が消え去った後のようにバブルが崩壊。物質主義に追われると人間性が失われ、真に生きるとはと考える時、時間をどのように使うかによって、人生の豊かさが決まるという普遍的なテーマに行き着く。エンデは、「時間は命」と言い切っています。亀のカシオペアを登場させて「いつも 30 分先のことが見通せる力を持っている」「未来というのは、いつもさしあたっては次の30分あるいは次の一日というものから生まれる」と。このことは「時間は貯める」ことではなく、一瞬一瞬を大切に生きることであると言いたのだ。その一瞬一瞬の日常とは、モモが一人で星空の荘厳な静けさに聞き入ったり、道路掃除夫のペッポのようにじっくり考え、時間がかかるが丁寧な仕事をしたり、左官屋のニコラのように、石のかまどをつくり見ず知らぬ女の子のために自分の特技を活かしたり等と示している。しかし、物質の豊かさの味を知り追い求めると、観光案内のジジのように居酒屋のニノのようにいとも簡単に豊かさを求め、その豊かさに慣れ、溺れる。この姿は異常だと思っても容易に抜け出せない姿も示している。

シュタイナーは「人間の誕生と死に関して、身体界で死んだ人間は精神界での生が始まる。その精神界での生がしばらく続くと、人間はまた再び地上の物理空間に降りてくる。今度は精神界での死であり、身体界の誕生。どの人間もこうした転生を過去においてすでに無数に繰り返し、未来にもまた果てしなく繰り返す」のだという。この精神界の死と身体界の誕生、転生の意味は今一つ何を言っているのか分からなかった。そういえばモモと灰色の男の大群に会う場面、モモが勇気を振り絞って、灰色の男たちとやり取りする場面。この場面にシュタイナーの言う転生の意図をエンデは表現させているのではないかと思った。間違っていた自分たちの価値観(精神界の死)を新しく作り変えていく、または取り戻していく(身体界の誕生)こう考えると理解できるし、現在の私たちも日常茶飯事に体験経験している。エンデは、ファンタジーの世界で時間の大切さを説きながら、どう生きるのが良いのかを警告しているのだと理解できました。人と話し合う、人の前で議論するためには、エンデの言葉「人の話を聞き入れる力、その秘密は自分を全く空にすることにある。それによって自分の中に他者を迎える空席ができる。入ってくるものは良いものか悪いものか問うことはしません」更にマイスター・ホラの言葉「話すためには、まずお前の中で言葉が熟さなければならないからだ」「本当に話したいのなら待つこともできなければならない」と。「空にする」「待つ」とは、本質を見抜く力をつけてじっくり自分の頭で考える態度が重要であることを訴えているのだと思う。簡単に人を批判したり、人に迎合したりするから簡単に風潮に流されてしまう。そういうことでは一人一人が真に豊かな人生を歩むことはできないし、自立できない。このことを、例会で「人の解説から分かったつもりになることの危険性」を厳しく指摘されました。

モモやペッポのように、時間をかけ。そしてゆっくり丁寧に取り組む姿勢。なぜ共感するのかなぜ反感するのかをじっくり考えながら本質を見抜いていく姿勢。そうしながら決断して行動していく。そのための基底になることは、自分自身を見つめ、見つめ直しながら自分を高次へと高めていくことが求められる。「時は金なり」ではなくて「時は命なり」人が人に流されな

いで生きることの大切さと難しさを教えてくれた児童文学「モモ」であったと老齡期の今の私の感想です。面白かったし、今後の生き方に大きな影響をもらいながら生きていく羅針盤になることだろうと思いました。

◆【 MM 】

今月は読書会のありがたみを強く感じる月となった。課題本が2冊あり、そのうち1冊がどうにも読むのが難しくて私は残り3分の1を読まずに参加した…。今月の担当者から配られた資料の中には読めずに終わった課題本の要約があるではないか！まとめるのは大変だったと思うが要約することで著者が言いたかったことが見えてくる。

物語の『モモ』は子どもの頃に読んだ。あれから約40年。今の私が感じたのは、自分で考えることをしなければいつの間にかいろんな情報や他人の価値観が自分を埋めていく。気づかないうちに自分がなくなっていく。50年以上前の物語は古臭いか？まったくそうではなかった。今の社会を表していて私は少し怖かった。効率を求めることは悪くないけれど効率に支配されてはいけない。いつの間にか…になっている、で思い出したのは先月の吉川先生の感想文の中にあった「平和の顔をした戦争はないのだろうか。(中略)日本の戦後の顔が、戦前の顔に挿げ替えられようとしていないか」という箇所だ。テレビにしてもインターネットにしてもいろんな情報が溢れていて、どう見るか、何を信じるかで変わる。SNSでは昨日たたかかれていた人の矛先があつという間に違う人にかわっている、というのも珍しくない。流れが変わるたびに翻弄されるのではなくて、私はこう思うという芯を持っていたい。

10代の時に読んだ『モモ』は今まで読んだ海外文学の中でも面白く、新しい感覚を味わったことを覚えている。読んでいてドキドキしたが今回のような危機感を持った記憶はない。こんなに印象が変わる物語もあるのだな。子どもの時は今のようなインターネット社会ではなかったし、その当時生活していた世界が自分の知るすべてだったから単純にストーリーを楽しんだのかなと思う。こういうことがあるから読書っていいな、読書会もやめられないなと思う。

読むのに難儀したもう1冊の課題本『「モモ」を読む』については読書会の中で「こういう本がある」程度に読んでみては？という話が出た。著者がエンデとシュタイナーの考えを結びつけようとするのが強く、今回はそこが私の心には響いてこなかった。でもこの本も時間を置いたら理解が進むかもしれない。要約があるのでまた新たな気持ちで読んでみたい。